

マーガレット・サッチャー著「サッチャー回顧録—ダウニング街の日々(上)—」

日本経済新聞社 1993年11月11日刊を読む

1. これら三つの挑戦—長期的な経済衰退、すべてを弱体化させる社会主義の影響、そして増大するソ連の脅威—は三つ合わさると、新しい首相をおびえさせるに十分な遺産だった。おそらく私は、フラッド街への道すがら、これらの脅威にもっと想像をたくましくして、実際よりもおじけづくべきだったのだろう。本書に記述されている、それからの11年間の間に起こった目まぐるしい出来事を予見できていたら、私は実際以上に懸念を感じていたことだろう。しかし、へそ曲がりなことに、私は挑戦を前にして浮き浮きした気分であった。われわれはこれらの問題すべてについて考え、語り、書き、討議し、議論し合ってきた。そしていま、もしこれからの何週間かがうまくいけば、ついにわれわれ自身でそれらに立ち向かうチャンスを手にするようになるのだ。
2. 私がこのような高揚した気分でいられた一つの理由は、野党党首としての4年間、幅広い層のイギリス国民に接していたからだ。国民は統計が示すよりもはるかに多くのことを教えてくれた。彼らは活力にあふれ、自主独立の気概をもち、国の衰退に気をもんでおり、衰退を逆転させるために必要な苦しい手段を受け入れる覚悟が、多くの国会議員以上にできていた。もしわれわれがUターンによって急進的な保守主義の公約を破れば、強烈な非難を浴びることになるだろうと私は確信していた。それは、保守主義への道を突き進むことで社会主義者から浴びせられる非難よりもずっと大きいものだろうと思われた。ジム・キャラハンもそうだったように、私は選挙戦を通じて、イギリス国民の政治感覚に大きな変貌が生じていたことを察知していた。国民は社会主義を放棄していた。その30年間に及ぶ実験は明らかに失敗だった。そして、それに代わる何か別のものを試そうという気になっていた。こうした変化こそ、われわれにとっての至上命令だった。
3. さらに、もっと個人的な要因もあった。チャタム(18世紀の政治家、首相、任1766-68)が次のようにいったことは有名である。「私は自分がこの国を救うことができ、ほかの誰にも救うことはできないことを知っている」。私自身をチャタムにたとえるのはおこがましいだろう。しかし、正直なところ、私が感じた高揚感は彼と同様、心の底からの確信に根ざすものだったことを認めなくてはならない。
4. 私の出自や経歴は伝統的な保守党の首相とは違っていた。私は彼らほど黙っていても敬意を抱かれることを期待できる立場にいたわけではない。しかし、私はおそらく彼らよりも変化のリスクにおじけづくことが少なかっただろう。1930年代の不況期に政治家として成熟した、私よりも年上の仲間たちは、政治の可能性についてずっと諦観的で悲観的な見解をもっていた。

おそらく彼らは、労働党と労働組合指導者を国民の願望の権威ある通訳としてあまりにも簡単に容認してしまいがちだった。私は、同じ言葉を話す人々に語りかけるのに、通訳が必要だとは思わなかった。そして、私自身が国民と同じような人生を送ってきたことが、真に有利な点であると感じていた。

P21 ~ 22

[コメント]

日本でも自由民主党が民主党に政権を移されようとしているが、下野している間に自由民主党はサッチャー女史のように幅広い層の日本国民に接し、この国のあり方を考えてもらいたいと希望する。

- 2009年6月30日林明夫記 -